

---

R.T.S

水深無限風呂

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト  
<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

R・T・S

### 【Nコード】

N0167Y

### 【作者名】

水深無限風呂

### 【あらすじ】

所謂『目立たない人種』である男子高校生、原木幸人は不幸にも不良を一人死に追いやってしまう。当然脱兎の如く逃げ出した幸人しかし、逃げている最中に一つの廃工場に迷い込んだことで彼の人生は想像を絶する“本番”を迎えた。RTS風邪道ファンタジー。チート要素皆無です、ご注意ください。

## 01 - 現実逃避

「くそっ……」

今日一日だけで百回は越えたであろうこの言葉。

別に誰に向けて言ったワケでもない。今更言ったって言葉は届かないから。でも不満が無いと言えば嘘になる。

こんな不満だらけの状況に相も変わらずイライラしていると、ガサガサッと再び後ろの方で物音。恐らく何かがつこめいているんだ。最初の方こそ怖かったが、今じゃもう慣れっこだ。むしろ姿を現さないのが嬉しいね、こんな森の中で出てくると言ったら熊、蛇、……山賊すらありえるかもしれない。……いや、ここだったら超巨大な蜘蛛が出てきてもおかしくない。きっと口からは鋼のように硬く、それでいてゴムのように柔軟で、接着剤のように粘り気のある糸を吐き出して、足先には人を五秒で死に至らしめる猛毒があるに違いない。

……ああやだ、そうだと思うと本当に居るような気がしてきた。あの虫みたいな下等生物が持つ特有の何も感じられない無機質な表情でこちらをじいーっと見て、襲うチャンスを探ってる……なんて考えるだけでそこ等のホラー映画より怖い。

「……なんで僕なんだよ……」

空を見ながら再び不満を口にする。別に言おうとしたワケじゃない、勝手に出てくる。

両足は走りすぎて棒だし、気力もない。残ってるのは理不尽に対する怒りと一ヶ台のS A N値ぐらいだ。あとは近日発売の『テストラクラフト - ?』が買えなかったことへの未練かな。

……『なんで僕なんだよ』……。

本当にそうだ、なんで僕なんだよ。

なんで僕がこんな目に遭わなくちゃいけないんだ。

他にも沢山居ただろ？　たとえば、バカみたいにクチャクチャ喋ってるDQN共とか、チャラチャラした服装にムカつく喋り方の男共とか、男女平等の意味を履き違えてるバカ女共とか！

ああいう世界にとつて害しかないヤツのがこうなるべきだったんだ！

それに比べ僕はどうか？　クラスでも目立たず、趣味はプライベートに抑え、勉強も高水準クラス、運動は……まあ、アレだけ……とにかく、世界にとつて僕が与える害は『気持ち悪い』程度だけだ！

僕を例えれば……そう、僕はアシダカグモだ。三匹家に済ませれば家中の黒い紳士……あるいは最も身近な生きた化石を全滅させてくれる益虫であるアレ。

知ってるかい？　アシダカグモ。

アレは素晴らしい虫だよ。本当に益虫の鏡だ。あの『名前を呼んではいけない虫』が現れた家に颯爽と現れて、Gを全滅させ、人知れず家から去って行く……まるで仕事人のような虫だ。

……たしかに見た目は気持ち悪いし。さらにはアシダカの名を名乗るだけあって足がとて長く、サイズもとても大きい。日本で、しかも身近に見れるサイズに限定すれば絶対に最大級のサイズを誇ってる。

しかも蜘蛛Ⅱ攻撃的という方程式があるが故に害虫と勘違いされる。……それに前途のサイズの問題も有り余って『タランチュラの猛毒を持った毒蜘蛛』なんかと勘違いされることすらある。

……はあ、本当に僕はアシダカグモだ。

アシダカグモも僕も見た目が気持ち悪いからって害虫扱いだ。アシダカグモも僕も怖がりで、怖がりで、臆病すぎなほど怖がりな益虫だっつのに。

………なんか自分を虫ケラ扱いしているみたいで気分が悪くな

ってきた。

まあいいや。……よくないけど。

何で僕 原木幸人は真夜中の森の中で愚痴をグチグチ言うてるか。

それを説明するにはまず、今日の下校中まで時間を遊らせなきゃいけない。

「ネえ、ネえ、キミさあ、ちょっといいカナ？」

「オレ達さあ、今ちよーつとカネに困ってんだよねえー」

「スコシでいいからさ、カシてくんね？」

ああ、最悪だ。

いつもの帰り道が工事で通れないってんで仕方なく繁華街を歩いていたところ……。

……言わなくても分かるところだけど、明らかに四六時中遊び歩いてそうなお兄さん達に捕まった。

最悪だ最悪だ最悪だ最悪だ最悪だ……。

「ンあ？ 聞してる？ ネえ」

「え、あ………えっと……」

「は？ ナニ固まってんの？ オレ達困ってんだよ？ ホラ、スコシでいいんだっつーの」

くそ、考える暇もない。

目の前の男達は全員が全員挑発的な視線を此方に向けてニタニタと笑いつつ僕の全財産を要求してくる。

……スコシでいい？ 冗談じゃない、全額持つてくつもりだろ絶対！

どうする？ どうすればいい？ 僕は残念なことに喧嘩とは無縁な人間だから殴り合いで勝つなんて無理だ。

喧嘩慣れしてるヤツでも1対3で勝てるかは知らないけど。

「いや、あの……ちょっと……」

「つかさあ、コイツ、さっきからドモってバツカでキモくね？

あ、もしかしてヒキオタクン？ コミュ障？ だったらゴメンネー！」

「ギャハハハハハ！ オマエ、やめてやれよ！ カワイソウじやん！」

「ソーソー、カワイソウカワイソウ！ ギャハハハハハ！」

「……………」

カワイソウ。

心にもない言葉だ、どうせそれは。

……別にそれはいい。コイツ等に笑われるのはまだ我慢できるんだ。

だけど、この騒ぎを横目で確認して、その上で無視して、それでいて心の中で僕を『カワイソウ』なんて考えの奴が一番ムカつく。

だって、それは僕に本当に同情してる言葉じゃなくて『あんなキモいヤツでもカワイソウと思える俺（私）ってホントイイヤツ』とか思ってる考えだから。

違う、とか言うヤツでも心の中じゃ絶対にそう思っているんだ。僕だって思うしね。

人は基本的に他人を蹴落とす習性があるから仕方がない。なんてのは十分に分かってはいる。

それでもムカつくモノはムカつく。

「……………あ？ テメエ、ナニ睨んでるワケ？」

……そんなくだらない事を考えている場合じゃなかった！  
どうすればいい？ 金を素直に渡すか？ ……渡すか……。  
渡すしか……ないよなあ。  
お金より身体。これ常識。

「チガウチガウ！ コイツは元々そう言う人相なんだろ、きっと！  
ギャハハハハッ！！」

「ああー！ そっかー！ そうだよなー！！ ゴメンナ、ユルし  
て？ ギャハハッ！！」

前言鉄塊粉碎だ、絶対コイツ等に金は渡さない。

……いやいや！ 何無駄なプライドを抱えてんだよ、僕は！ 素  
直に渡せ！ 痛いのも疲れるのもやだろ！？

「……だアーら、何睨んでんだつつんだよッ！！」

「……つつー！！」

目の前の不良にぐいつ、と胸倉を掴まれ、引っ張られる。

ああ、終わった。僕はこの後二、三時間の間殴られ続けるのだろ  
うか。

それだけは絶対に勘弁だ！！ 痛いのは、絶対に、イヤだッ！  
そう思えば考える前に行動に移るのが人間。

両手で目の前の不良を強く押す。

「うおっ」

抵抗は無いものだと思っていたのか、不良の手は簡単に放れて、  
そのまま不良は一メートルほど下がって軽く倒れる。

やつつまったあ。もお、だめだあ。ぼかあ、ここで死ぬ。

……バカな似非訛りやつてる場合じゃない！！

どうするどうするどうする！？ 殺されるかもしれない！！

「てめえ……調子乗ってんじゃねえぞ……、おい、お前等。ソイツ  
逃がすな」

突き飛ばした不良は明らかにマジギレしてる。更には左右に立つ  
てた不良達が僕の両手を拘束する。

ああああああああああ。

死んだ、詰んだ！

マジギレしてしまった不良は懷に手をつ突っ込んで何かを取り出そ  
うとしている。

ナイフか！？ バタフライナイフとか！？ 殺される！ 絶対殺  
される！！

「ぶち殺してやる、……野郎ぶつ殺してや」

マジギレした男がナイフを構え、此方に突っ込んでくる。

ああ、終わったな。ヤマモオチもないつまらない人生だった……。  
ギギギイキイイー……ツツと。

潔く諦めた僕の耳に突然の空気を裂くような音。

光は音より速いはずなのに。

音より後に状況を理解した。

先程まで不良が立っていた位置には白いコンテナトラックが一台  
横たわっている。

……何事？

いや、考えるまでもない。

さっきの音からして。

コンテナトラックが横転し、そのまま滑りこんできたんだ。

……不良は？

絶対死んだ。死なないはずがない。



「…………あ？ ……おい、…………は？」

左右の不良も未だに事態が飲み込めないのか、僕を拘束すること  
も忘れて立ち尽くしている。

…………チャンスだ。

不良が死んだ？ 僕には関係ない！ きっと僕以外のヤツにカツ  
アゲしててもアイツは此処で死ぬ運命だったんだ。

そうだ、そうに違いない！ 僕は関係ない、関係ない、関係ない、  
関係ない…………！！

逃げる、逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる逃げる！！  
さっきも言ったが、そう思えば考えるよりも早く身体が動く。

僕は勢いよく地面を蹴り上げると、何処へ向かうでもなく無我夢  
中で走り続ける。

とにかくこの場面から離れるように。

あの時不良に素直に金を渡していればアイツは死ななかつ  
たんじゃないのか？

…………うるさい！！

実は僕のせいでアイツは死んだんじゃないか？

…………うるさい！！

実は。

うるさいうるさいうるさいうるさいうるさいうるさい！！

僕は無関係だ、僕は無関係だ！！

暴れるように足を振り回し、とにかく走り続ける。

何処に行くか分からないけど、離れられているかわからないけど。  
走ってないと頭がおかしくなりそうだ。

そんな僕の頬へと冷たい感触。

雨。

そう認識した途端に冷たい感触は数を大幅に増やす。  
どうやら大雨らしい。

……何処かで雨宿りしないと。風邪引くなんてゴメンだ。  
そう思って目を走らせると丁度良さそうな廃工場を見つけた。  
……不良が居そうでやだが、居たら居たで違う場所を見つければいい。

決めたら後は単純、廃工場まで走る。

走る走る走る。脳に酸素を送らせない、考えさせない。現実逃避だ。逃げろ、現実から逃げろ。

走れ走れ走れ走れ走れ！

走れ。

「はぁーっ、はぁーっ……ぐっ、え。げほっ！　っ、かはぁーっ、かはぁーっ！　り、無理！　もう、無理っ……！！！」

殆ど倒れこむ形で廃工場内に入り込む。

死ぬ、死ぬっ……！！

死んじゃう……っ！！

いったい何キロ走ったんだ……！？　フルマラソンと同じくらいは走ったんじゃないか………？

どうでもいい、もうどうでもいい、疲れた。疲れすぎた。

何も考えられない、ちょうどいい、今は何も考えたくない。

逃げたい。この現実から。

もう何もかにもがイヤだ。

両親は僕をマトモな目で見ない、学校に友達もいない、理解して

くれる人もいない。

楽しみもRTSリアルタイムストラテジーくらいしかない。

うんざりだ。

もういやだ。

こんな　。

「こんな世界はもうイヤだ、か？」

「ああそつだよ！ もうイヤだ！ こんなせか……！？」

無理矢理に勢いよく身体を起こす。

今誰か居たよな！？ 僕に喋りかけてきたよな！？ ……読心術も使わなかったか！？

だ、誰！？ N I N J A？！ N I N J Aか！？

「こつちだ」

バカみたいにキョロキョロと見回す僕へと声が掛かった。

なるほど、そつちか！

勢いよくそちらを見ると真っ白な犬が一匹……、犬？ いや、狼か？ どつちだ？ 狼……か？

……いや、どつちにしろ危ないだろ！ 僕の頭とこの状況は！

野良犬、あるいは狼だぞ！？ 僕は殺される！ ……というか犬or狼が喋る幻聴聞くとか……僕の頭はもう終わってるんじゃないか！？

……あれか！ さつき全然酸素取らなかったからトランスでもしたのか。

「安心しろ。お前は普通だよ」

「普通じゃないから焦ってるんだ！」

「いや、普通だ！」

「何処が！？ 犬or狼の声が聞こえるんだぞ！？」

「狼だよ！ 犬って言うな！ オアってなんだ、オアって！ こんなに凜々しい犬が居たら困るわ！」

「困らねえよ！ それにそんなに凜々しくないし！ ドーベルマンとかジャーマンシェパードとか見てからモノを言え！」

ああ僕はもうだめだ、犬……じゃない狼と会話してる。

……会話できてる！？ 幻聴じゃないのか！？

「ふん、やっと理解し」

「ああ、なるほど。幻聴だけじゃなくて幻覚も合わさってるのか。そうだよな、こんな場所に狼が居るのはおかしい」

「だから頭ごなしに否定するのをやめろう！」

「いや、可愛くないし」

「えっ」

「……可愛いと思ってやったの！？」

「え、まあ……うん……」

むしろ怖い、喋るたびに鋭利な歯が見え隠れして怖い。

……というかもう……僕、疲れすぎだろ……。

なんで狼の幻覚見た上にそこに萌えを見出そうとしてるんだよ……。

…。

「ええい、だから幻覚じゃないと言ってるだろ！？ なぜ分からん？！」

「分かつたらもう、白い翼生えたり、冷蔵庫になったり、工場長になつたりしそうなんだもの」

「ならんわ！ それ以上に意味分からん！」

俺の常識はテメエには通用しねえ。って？ はは、面白くない。

笑えない笑えない。

……しかし此処まではつきりしてるとなんだか触れそうだな。触れるのか？ 触れたら幻覚じゃないよな……。そして幻聴でもない、

……いやいや、まさか……そんなバカな。

「うん？ 触りたいのか？ 好きなだけ触れ！ ほら！」

「……………」

「どうした？ 触らないのか？」

……どうしまったんだ、僕の頭は……。

落ち着け、もしかしたら幻聴だけかもしれないんだ、その場合に触りに行ったら喰い殺される。

落ち着けー、落ち着けー。

僕は猫派僕は猫派僕は猫派僕は猫派……。

よし、もう僕はあんな狼には惑わされないぞ、ぬこ最高！

「ええい、ネコなんざ考えてないで早く触らんか！ この臆病者め！」

「いいかい、勇敢なのと、無謀なのは違うことなんだよ」

「知ってるわ！ ……第一、そこまで怖くないだろう？ ベースはツンデレオオカミだぞ？」

つ、つんでれおおかみだと……？ ツンデレオオカミ 冷甘狼……？

なんだそれは……新種か？ いや、もしかしたら新作のアニメかエロゲかラノベか？ ……ラノベかエロゲの線が強いな。

あれか、ヤンデレオオカミとかクーデレオオカミとかもいるのか。……狂デレオオカミとかツンヤンデレオオカミとかは勘弁願いたいな。……ああ、ダルデレオオカミがいいかもしれない。

多分巨乳だろ。ダルデレオオカミ。

「そんな亜種は存在せん！」

「ツンデレ100%！？ それは話が進まないと思う！」

「第一、ツンデレというのは地域名でな……」

地域名だと！？ ツンデレ！？ ツンデレ諸島とかか？！  
いやいや……なにそのエロマンガ島みたいな……。

……ツンデレ、地方名……狼……。

「あんさん、それツンデレちゃう、ツンドラや」

……ツンドラじゃね？ いや、ツンドラだろ？

ツンドラとツンデレを勘違いするとは……ドジっ子属性か。

……ますます僕の頭は終わってるなあ、くそお。

「えっ」

えっ、という言葉と同時に牙がむき出しになる、怖い。

……コイツバカだ。

イヤ違う。

こんなキャラを妄想してる僕がとてつもなくバカだ。  
バカって次元じゃない。

もうイタイ。イタイぞ、僕よ！ アイタタタ……。

「ああもう！ どれだけ私を否定すれば気が済むんだ！？ ならストレートに行くぞ！？ 私はな、神だ！」

「ハハッ、神だってよ奥さん！ 僕ってばテンプレすぎワロタ！

……わろた……」

「だー！！ ム力つくなこの男！！ 何が『次に会うときも僕は変わらない』だ！！ 初期化されてるじゃないか！！」

どうやら僕の脳内に存在しているこの狼の脳内設定では僕とコイツは前世で結ばれた仲だったようだ。……僕って……いったい……。っていうか、今更だけど声は可愛いな。……もしかしてメス！？

「今更か！？ 今更なのか！？」

「あ、メスなのね」

「た、確かにメスだが……どっちかっていうと女の子って呼んで欲

しい……かな……」

「いや、無理です大佐」

「何で!？」

「いや、僕ケモノじゃなし」

動物を女の子って、無いわ……。

「……というか？ 狼の姿で？ 『わたしは かみです』とかいわれても？ 実感湧かないっていうか？ ……なんで狼？」

「大きな神と書いて、大神と読む……、どうだ、上手いだろう」

「パクリですねわかります」

「ぱ、パクリって……」

「ああもう、帰ろう。家に帰ろう。こんな意味不明な幻覚の相手しられない」

「え、ちょ……」

「あー、ここ何処だか分からないし……道分かんねえ」

「あ、あのー？」

「……」

「も、もういい……もういい!」

あまりにも自分の幻覚が意味不明なので無視を決めていたら、次第に狼の声が震えだした。

……あれ？ 泣いてね？

うわ、脳内ペットを泣かせてしまった。まあ、別にいいか。

「お前は理不尽なのが好きなんだろ？ 逆境に燃えるんだろ？ だったら何も説明は要らないな？ っていうかどうせ否定するだろ！ ? よし、もういい。好きなだけ現実逃避してしまえ。何かもから目を逸らして逃げ続けるがいいさ!」

……あれ、怒ってね……？

とか思っていると、ドガンツという音が僕の真上で起きる。  
思わず上を向けば、鉄骨が二本三本落っこちてきている。

アレ、これ僕死ぬんじゃない。

まさか。

神……？

といった会話があったのが数時間前、そしてその直後に僕は赤い月と青い月が二つ空に並ぶ奇怪な場所……。

所謂『異世界』に飛ばされましたとさ。

ああ、めでたくないめでたくない。きっとこのまま僕、はらぎゆきひと 原木幸人は餓死やらなんやらで死ぬだろう。

しかしまあ、現実逃避とは……このことか。

よもや現実から逃げた末に異世界に辿り着くとは……。

どういう展開ですか……？ ゾンビになったりマスコットキャラクターがラスボスだったりしたほうがまだ理解できる……。

……はあ、もう疲れた……。

元々足が棒だったのに、こっちに飛ばされてからもがむしやらに走ったし……。

寝よう。もう寝よう。起きたら全部元通りさ、きつと。

そう思ってゆっくりと目を閉じる。

閉じたと同時に睡魔が思いっきり牙を向いてくる。

ああ、そんなにがつつくなって……すぐに寝るからさ……。



## 02・イヌミミ的な（前書き）

極めて、イヌミミ的な、何か。

## 02・イヌミミ的な

「おい、起きろ」

……朝か？

ゆっくりと目を開ける。

そして目に飛び込むのは、明るい空、そして、目の前に立つ二つの影。

「起きたか？」

逆光で顔の細部までは見えないが、可愛らしい声を聞く限りじゃ恐らく少女…… ああ、きつと僕の妹だろう。

妹が二人とは…… ふふ、僕ってばリア充。

さあ、胸に飛び込んでくるといい。

そう思っ て両手を広げる。

ふふ、きつと『お兄のバカ！』とか言いながらドロップキックを……。

「……は？」

ん？

妹の反応が変だぞ……。

いやまて、僕は一人っ子だぞ。……は？

……誰？ というか仮に妹だとしても両手広げたらドロップキックしてくるって…… どんだけアクティブな妹だよ。

相変わらず僕の頭は終わってるな、こんなんだからツンドラオオカミの幻覚なんか見るんだよ、まったく。

「寝惚けているのか？ それとも単純にバカなのか……」  
「まあ、何にせよ。よく一晚無事でしたね」

は？ 無事？ 何、戦争？  
いや、違う。

やはり昨日のツンドラオオカミは幻覚ではなかったのだろう。たぶん。

僕の中に生まれたその考えを確かめるべく、空を見上げる。  
見事に黒い太陽が浮かんでらっしゃった。

ああ、ああ……。

ようやく状況を理解した、ここはアレだ。  
昨日散々グチを吐きつつ寝入った場所だ。

……黒い太陽ってなんだよ、ファンタジーもいい加減にしろよ。

「……おい、聞いてるのか？」

突きつけられた現実には僕が心を折られそうにしていると、覗きこむ少女のうち、気が強そうな少女が胸倉をグイッと掴みながら顔を覗きこんでくる。

なんと暴力的なんだろう。いや、それ以上に顔が近い！ 息が当たる！

嬉しい！ じゃなくて、苦しい！ というか胸倉掴まれると昨日のDQN共を思い出す！

……軽くトラウマになってるな、たぶん。……いや、重いトラウマか。

しかしまあ、それはさておき。

間近では逆光などあってないような物で、少女の顔が細部まではつきりと見える。若干刃こぼれした鋭利な刃物のように鋭いのか違うのか微妙な眼つき、あるいは鋭くなりきれない眼つき。整った顔のパーツの各々のバランス。

恐らく、この少女は可愛いと綺麗の中間あたりだろう。……ちなみに年は推定では十四歳前後か。

なんて風にゆっくりと観察をしていると、不意に襟を放される。

「こいつ、死んでるんじゃないか？」

どうにも死なれたと思われたらしい。

……いや、ソレはおかしいだろ！ 某新世界の神にノートに名前でも書かれて殺されたのか、僕は！？

「隊長はバカですか？ どう見てもまだ生きてるでしょう？」

どうやら、襟を掴んできた少女ではない少女も僕と同じ……ではないだろうが、似たような考えだったらしく、襟を掴んできた少女を鼻で笑いながら小馬鹿にするような言動を取る。無論襟を掴んできた少女……もとい隊長と呼ばれた少女は「バカだと！？」バカと言ったか今！！」と激昂しつつ、もう一人の少女に詰め寄るが、もう一人の少女は半笑いのまま、視線をそらしつつ、受け流している。……隊長と呼ばれていても、そんなに尊敬はされていないようだ。あるいは半笑いの少女の性格がねじくれているか。

「ふんっ、まあいい……。おいオマエ、自分で歩けるなら私の村で少しは休ませてやる。来るか？」

……いや、なんでだよ！ なんで歩けたら村で休ませてくれるんだよ！？ 単なる親切心なら申し訳ないと思うけど、僕的には畏の予感しかない！

というか歩けなかったら放置するのか！？ いやいや……歩けないほど重症なのに放置するって、鬼やん。

ってというか完璧に畏じゃないか！ だってもう、歩けなかったら

放置って時点で親切心はゼロだろこいつ等！

「……もしかして、畏ではないか、と考えてますか？」

そんな疑り深い僕の心情を見透かしたかのように、隊長と呼んだ少女は僕へと語りかけてくる。

……やるじゃない。

絶対立場を逆にしたほうがいいと思う、この子達。  
しかしまあ、口に出したら何されるか分からないから言いはしないが……。

「畏だと思っているのなら、それは間違いです。単なる親切心ですから」

断言しよう。

それだけは、それだけは……どんなことを言われても絶対に信じられない、と。

だってもう……満身創痍っぱい僕を見つけて親切心から村に招こうと思うんだったら胸倉掴まないだろ。普通、っていうか絶対。

いや、だがどうなんだ……？　もしかしたら……ほら、ちょっと不良ぶってるけど、実はむっちゃ親切なのかもしれない。

どうするのが正解なんだ……？　どっちだ……？

「いや、でも……、いやぁ……。うーん……」

「っう！？」

唸ってみたら。

何故か隊長と呼ばれた少女は思いつきり身を引き、そのまま後ろにぶっ倒れる。

いや、何？　僕なんかした……？　いや、してない。

「くふつ、くははははは！ た、隊長つ、何やってんですか、す、すっごいバカみたい、ですっ！ あはははは！！」

その姿を見て大笑いする隊長じゃないほうの少女。……ああ、この子はきつとSなんだろうなあ。などと思つてると、隊長と呼ばれた少女は未だに目を見開きながら此方をじっと見ている。

……僕が何をしたってんだい。

「わら、っ、笑うな！ おと、っ、男の声はここまで低いものなのか！？」

……いや、何処に驚いてるんだよ！？ いや、それ以上に驚きすぎだろ！？

は？ 何？ 箱入り娘？ いやでもおかしいだろ、男の声すら聞いたこと無いって。

……というか僕はそこまで低くないと思うんだけど。……低いのかねえ。

いや低くない！ 中学三年で結局声変わりしなくて、合唱の時にアルトにぶち込まれて、男子一人で肩身が狭い思いしたんだから絶対に低くない！

「ふう、失礼しましたね。まあ、あのバカみたいな隊長は放っておいて……、今、どんなこと考えました？ この隊長みて。……バカだと思いましたよね？」

「いや……、男の声聞いたこと無いってどんな環境で育ったんだ、とは思ったけど……バカとは……さすがに……」

まあ、思っただけ。口には出さない。何されるかわからん。意味不明なほど世間知らずな少女だ、いきなり殺しにかかってく

るかもしれない。

「さ、さつきから黙ってればバカバカバカうるさいな、お前は！」

と、そこで隊長と呼ばれる少女が隊長と呼ばれる少女へと文句を言う。いまいちキリツとしない目にたつぷりと涙溜めて。

そこまで怖がられると軽く傷つくな。と思いながら何となく少女の顔を観察していて。

物凄いい見をした。

頭の上で、二つの突起が折り畳められて、小刻みに震えている。

……ああ、あれは……そうだな。犬が恐怖を感じたときに行う行為だな。

じゃあ、あれ、耳か。

耳……。

！？

待て、耳？ ……あ、ああ、所謂犬耳ってヤツか。そうかそうかなるほど、納得できない。絶対おかしいよこんなの！

いや、落ち着け。

太陽が黒い世界だぞ？ 月が二つある世界だぞ？ ファンタジーくせえ世界だぞ？ だったらあれは。

そう、あれは……うん。獣人族ってヤツだ。……うん。

「何だ、こつちを見て……気味悪いな」

気味悪いて。

正直な感想を言わせて貰えば此方の方が気味悪いわ！

なんだ、その耳は！？ 確かに僕は虹絵を見る時に『イヌミミはくあーいいいなあー！』とか思っていたが。

実際に見ると……。うん……なんか、違和感。

ええ、イヤ……何？

その違和感を突き止めるべく、気色悪いと言われたことにめげずに、じつくりと観察する。

視線は何度も会うが、無視。何故だ、何が僕に違和感を……。

此方がじいつと見ていると、隊長と呼ばれた少女の方は急に顔をそらし、膝を抱えて所謂『体育座り』あるいは『三角座り』のポーズを取って丸まってしまった。

よく見れば顔を赤くしているし、どうにも恥ずかしかったらしい。あ、これは少し可愛い……そして違和感も若干薄れる。

なるほど、違和感の正体は不機嫌そうな顔だったか。まあ、そうだろうな。不機嫌そうな顔してイヌミミつけてりゃ違和感も感じるわ。

……なんだ、あれだな。耳ついてればとりあえず可愛いってのは間違いなんだな。

「うん？ ……もしかして、フェンリア族を見るのは初めてでしょうか？」

「は？ ……フィン・ファンネル？ 某起動戦士の？」  
「難聴ですか？」

可愛いな、とか思いつつ隊長と呼ばれた少女を凝視していたところ、隊長ではない方の少女が意味不明の言葉を発してきた。

……難聴ですか？ って……。

口悪いな、この子。

「難聴で」

「違うんですか？ いや、違わないですよ。だってフェンリアをフィン・ファンネル？ みたいな感じに聞き間違えるなんて……。ちなみにフェンリア族ってのは、世界的に見てもそこら中に雑草のよう

うに生息してる魔物ですよ」



雑草のようて。

話を聞く限り、どうもこのイヌっぽい獣人族達の種族名はフェンリアと言っらしい。恐らく造語。あるいはこの世界独自の単語だろう。

しかし、どうにもこの少女は若干毒舌が入っている気がする。……いや、雑草で……。

っていうか自虐じゃないか。もしかしたら超ストレートなだけかもしれない。

「お、オマエはまたそうやって……我等は誇り高きフェンリア族だぞ！？ 雑草ってなんだ、雑草って！！」

「えーっと。黙っ<sup>ウィード</sup>とけ雑草」

「うい、ういーど？」

「北の大陸の言葉で、『雑草』という意味ですよ。隊長」

「おお、なるほど。オマエはどうにも死にたいらしいな！？」

英単語も存在するのか、ううん、基本的には僕の元々いた世界と同じで、新しい単語が混じってる……って感じでいいのか？ どうなんだ……？

まあ別にいいか……。そのうち慣れる。……慣れる前に死にそうだけど。

なんて考えていると、隊長と呼ばれた少女はどうにも雑草扱いされたことが気に食わないらしく、激昂し、立ち上がると同時に毒舌少女へと掴みかかった。なんとも血の気の多い少女だ。

まさに『犬』。……いや、もしかしたら狼かもしれないけど。

「大体オマエはどうしていつも私に反抗的な態度を取るんだ！？ 私が何かしたか！？」

「あーあー揺らさないでくださいー、隊長みたいになるうー」

「またバカにしたな！？……ああ！もういい！で、オマエは来るのか来ないのか、どっちなんだ！？」

ガクガクと揺らされる少女と揺らす少女を見ていたところ、どうやら話題は最初に戻ったらしい。

ううん、どうしたものか……。畏だとしても……なんか、生き残れる気がする。

だけどなあ。……うーん。

「ああ、死ぬかと思った……。て、まだ悩んでるんですか？なら、いい情報をお伝えしましょうか」

「いい情報……？」

隊長と呼ばれた少女の手から抜け出したらしい毒舌少女は、悪戯っぽい笑みを浮かべつつ、僕へと話しかけてくる。

いい情報。あれか、バーゲンセールとか。……いらねえ。そもそも金ねえ。

「実を言えば。私達の村には男が居ませ」

「よし、是非とも連れてつてくれたまえ。……ああ、あと勘違いをするんじゃない。これは別に男が居ないという言葉に釣られたのではなく、男という脅威となる存在が無いことにより、もしも畏だった場合に僕自身にも逃げる手立てがいくつもあるな、とそこまで計算しつくした上での答えであり、決して、断じて決して！女だけの村という響きに惑わされたわけではない。もしもこれを小馬鹿にし「やはり女だらけの村という言葉に惹かれたんだろ？」などと言う輩が存在すれば、その輩は極めて愚鈍かつ矮小。そして何より馬鹿な存在である……と先に言わせてもらおう」

「あ、はい。別にどうぞ」

ぜんっぜん惹かれてないからな！　まああつたく惹かれてないからな！

うんうん、本当本当。これを信じない奴がいれば、そいつは確実にコミュ障だね。人を信じることができないなんて最低だ。

さあ、行こう。いざ行こう。夢の村、ドリーム・ビレッジへ。

勢いよく立ち上がる。足も自然と回復している。うん、夢の村のおかげに違いない。

ああ、ちなみに勘違いしないでくれよ？　夢の村ってのは休めるから夢の村であって、決して女だらけの村だから夢の村ではない。……え？　誰も女だらけなんて言っていないって？　知りません。

「ひゃ……大き……」

立ち上がった僕を見て再び隊長と呼ばれた少女は目を丸くしている。

……そこまで僕は大きくないぞ。というか何故か卑猥に聞こえる僕はきつともうダメなのだろう。

だがそんな事はどうでもいい！　夢の村！　夢の村！

「うーん、この体格差……数で攻めなければ苦しいか……」

「それは畏宣言だね？　畏って言ったのと同じだね？」

毒舌少女は立ち上がった僕を見て顎に指を当てつつ、何かイヤな感じの言葉を呟いていた。

畏かよ。畏なのかよ。いやしかしまあ、うまく立ち回れば逃げるぐらいはできるだろう。多分。

体格的な意味で。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0167y/>

---

R.T.S

2011年11月11日20時13分発行